

# 大**中**PRIDE



大津町立大津中学校  
生徒指導通信15号

令和5年12月1日(金)

文責：岡村 康平

## 「もうひとりの私」

今回は栗山英樹監督の話を紹介させていただきます。記憶に新しいのは、2023年3月22日、ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)で日本代表を優勝に導いたことだと思います。多くの成功を収めた監督ですが、順風満帆な人生ではなかったようです。

栗山監督は、テスト生としてヤクルトスワローズに入団しました。まず、周りの選手とのレベルの違いに愕然させられます。どうにか一軍でプレーできるようになれるやいなやメニエール病を発症、29歳で現役を引退させられます。引退後はスポーツキャスターとして活躍されていました。51歳の時に北海道日本ハムファイターズの監督に就任させられますが、プロ野球選手としてのキャリアは7年、コーチとしての現場経験なし、指導者として何の実績もない立場でチームを率いられることになられます。

監督として、仲間として、人間として、チーム内でどのように振る舞えばいいのか。日本ハムファイターズを野球チームとしてのレベルを上げていくのと同時に、選手の心を動かし、心の絆で結ばれた集団を作り上げまとめ上げていくこと。栗山監督はこのことに精魂を込めていくことが自分の仕事だと考えられます。そして、自分自身を高めていくために『四書五経』などの古典や経営者の著書を読み、野球ノートを毎日綴られました。以下、その野球ノートをもとに書かれた本「栗山ノート」のまえがきから引用させていただきます。



2012年に北海道日本ハムファイターズの監督に就任してからは、シーズン前のキャンプから必ずノートを開くようにしています。その日のスケジュールがすべて終わった夜に、自室でペンをとります。日記をつけるような感覚です。

練習でも試合でも、実に様々なことが起こります。私自身が気づくこと、選手やスタッフに気づかされることは本当に多い。つまりは書くべきことは多い。ところが、ノートを開いてもすぐには手が動かず、白いページをずっと見つめたり、部屋の天井を見上げたりすることがあります。

監督としての自分に、言いようのない物足りなさを感じているのです。チームを勝たせることができていない。勝たせることができたとしても、選手たちに必要以上に苦勞をさせてしまっている。反省点は数多くありますから、とにかく書き出していきます。書き出すことで頭が整理されるものの、理想と現実の狭間で揺れる気持ちはなおも落ち着かず、気が付けば窓の外が明るんできてもあります。

自分の無力さに絶望したのは、一度や二度ではありません。思い詰めて、もがき苦しんで、考えを構築して、壊して、もう一度再構築して、といった作業を繰り返していくうちに、心のなかで違う自分が立ち上がってきます。最初は遠慮がちに囁きでしかないので、次第に勇ましく声をあげるのです。

「おい栗山、お前は何を悩んでいるのだ。  
悩む前にできることをやり尽くしたのか。  
もうこれ以上は努力できない、と胸を張れるのか。  
そもそもお前は、野球のエリートではないのだろう？  
ファイターズの監督という仕事に就くことができたのも、たくさんの人の心配りや支えがあったからだ。  
自分の人生を野球に捧げられることに感謝こそすれ、野球に苦しめられているなどと考えるのはおこがましいぞ。  
もっと努力しろ、もっと頑張れ。  
もっと選手に尽くせ、もっとスタッフに尽くせ。  
もっとファンに尽くせ、もっと人に尽くせ。」——俯きがちの私を、もうひとりの私はそう言って叱咤するのでした。

私も日々の生活を送っていくなかで、理想と現実の狭間で揺れ動くときがあります。辛い場面や苦しい場面、困難に直面したとき、「これくらいでいいだろう」や「面倒だからやめておこう」という心の中の囁きが出てくるのです。

確かに楽な選択をするという手段もあると思います。しかし、「楽な選択をして困難から逃げた自分」と「きつい選択をして困難を乗り越えた自分」を想像したときに、全く違う自分がそこにはいると思います。

中学生という多感で、多くのことを学んでいる時期だからこそ、後者の選択をし、卒業したときにはるかに成長した「もうひとりの私」を想像してほしいと思います。

「やるかやめるか、それで言えば、やめるのは一番簡単な決断だ。難しいからやめよう、不安だからやめよう、そうしていればたしかにリスクは回避できるかもしれない。でも、決して前には進めない。」

これも栗山監督の名言です。

あなたの中の「もうひとりの私」は困難に直面したときに、どんな選択を与えてくれますか…？